

# 第11回せんがわ劇場演劇コンクール 受賞者インタビュー オーディエンス賞 オパンポン創造社 野村有志さん

## ●オパンポン創造社 野村有志

2004年8月、一人演劇ユニット「オパンポン創造社」旗揚げ。

全作品の脚本・演出を野村が務め、ペースと笑いを融合させ泥臭い人間模様を描くのを得意とし、独自のテンポと間を駆使した台詞で魅せる作品が支持されている。役者としても精力的に活動中。



## オーディエンス賞を受賞された率直な感想をお聞かせください。

グランプリを獲れなかったのは非常に残念ではあるんですけど、表現を生業にしている者としてオーディエンス賞を獲れたということは嬉しく思います。

今後映像を含めていろんなところに活動の幅を広げていきたいと思っているので、関西の劇団として関東の劇場のコンクールで賞を獲れたということがよかったなど。

## 今回コンクールで上演していただいた『サンセット』という作品について教えてください。

元々は「笑い」をテーマに各劇団が作品を持ち寄ってくる「縁劇フェス」というイベントがありまして、そこで初めて上演した作品です。

そのフェスティバルでは「笑い」ということに対して単純に面白いコメディを持ってこられてる劇団もあったんですけど、僕としてはその「笑い」ということに対して「客席で笑っている人と笑っていない人がいる」という状況をつくりたいなと思いました。

客席の中でも笑っている人と笑っていない人がいて、お互いの存在を感じながら舞台を観ることでより意味合いが変わったりする、観ている方々にとって千差万別の反応や感想を持っていただけるような作品を目指しました。

## オパンポン創造社さんでは「笑い」は得意にしていらっしゃるんですか？

一昨年から吉本興業へ所属していたり、作品のなかにも笑いは多い方だと思うのですが、お笑いのプロばかりが周りにいるので「お笑いが得意」とはなかなか公言できないですね。むしろどちらかというと「お笑いは難しいな」という印象です。

今回の作品も、そんなに笑いがなくても成立するような作品です。登場人物たちは延々とマラソンの話をしているんです。実際普段の僕らって、会っても毎回同じ話ばかりしてるんですよね。



昔話であったり最近のことであったり、文字にしたら「ぜんぶ同じ話ばかりしてるなー」っていうか、壁一枚向こうにはいろんな現実があるにも関わらず、会ってみたら同じことばかり話しているなっていう状況があつて。

今このコロナ禍の状況下で特にそうですけど、そういう壁一枚を隔てたところで日常と非日常が存在する状況と、そうした状況を描くことで、結果として笑える人と笑えない人が生まれたら非常に面白いんじゃないかなと思ってつくりました。

オパンポン創造社さんは関西で活躍されていますが、せんがわ劇場を知ってくださったきっかけはなんだったんですか？

僕の大好きなコトリ会議さんという劇団がありまして、コトリ会議さんがせんがわ劇場のコンクールに出ている（第9回せんがわ劇場演劇コンクール 2018年）、「あ、コトリ会議が出演するやん」ということがきっかけでこのコンクールを知りました。

（野村さんは『セミの空の空』（2019年）にてコトリ会議にも出演。）

これまでもいろんな演劇祭やコンクールに参加してきて、そのたびどんな劇場でも稽古したものを出すだけだと思ってやってきましたけど、上演してみるとせんがわ劇場はすごくやりやすい劇場だという印象がありました。

お話にもあったようにこれまでにオパンポン創造社としてさまざまなコンクールや演劇祭に参加されてきていますが、せんがわのコンクール全体についての印象や感想はいかがでしたか。

本当に今年演劇コンクールを開催して頂いたことについて、関わった皆様に感謝という気持ち大きいです。

なによりも参加団体の皆さんですね。地域の区民センターなどの利用時間の制限など、稽古場の制約がある中でどの団体も欠けることなく作品をつくり、上演できたことに感謝したいと思います。

ただ一点アフターディスカッションに関しては、正直賞の発表の後にアフターディスカッションは、賞を獲っていない団体にとっては地獄やと思うんですよ、あれ。

「フラれた相手に告白理由を言え」っていうのは、参加団体に敬意がないとは言いませんけどある団体とか「怒られてるやん、これ…」みたいな空気も感じましたし「なんで怒られなあかんねん！」という気持ちにもなりました。

この状況で参加したこと自体にまず敬意を持って接して欲しい、褒めてくれてもいいぐらい、というか、そんな低レベルなところで語ってもしゃあないと思うんですけど、あれはなかなか厳しい場だったなと思いました。

抗原劇場（アレルゲンシアター）さんも、賞の発表があってその後一発目のアフターディスカッションで、気持ちがちょっと落ち込んだ中でいきなり作品についての説明を求められるのは表現者にとって厳しいなとは思いました。

アフターディスカッションをご覧になった方からは「今後もアフターディスカッションを続けてほしい」という意見も沢山あったかとは思いますが、その意義はよくわかるんですが…。

参加団体としても前提としてまず「上演したものがすべて」だと思うので。

だからあのアフターディスカッションの場はしんどかったですね。とはいえ客席や生配信で観ていらっしゃる方々もいらっしゃいましたし「テンションを上げないと！」と僕も空回りをしてしまった部分がありました。

専門審査員の方からの作品についての講評もなかった中でのアフターディスカッションだったので「ちょっとかましていかないと！」と思って「グランプリ獲れなかったのはなんでなんですか!？」というところから話し始めてしまいました。

オーディエンス賞を頂いていたとはいえ、それでもあのアフターディスカッションの場はちょっと参加団体としては厳しかったですね。それ以外のことに関しては、もう開催して頂いたことに感謝です。

アーティストにあまり負担をかけないような場のつくり方など、次回以降で工夫をして、参加して下さる皆様にとってより良い時間になるよう改善していきたいところです。

コンクールの他の団体の上演はご覧になりましたか？

YouTubeですべて観ました！

抗原劇場（アレルゲンシアター）さんは、ところてん方式というか一人芝居が連なる形式で一人一人の俳優さんのクオリティが高く、とてもおもしろく観ました。観ている一人一人が問われている感じがすごく好きでした。すべての台詞がすごくシニカルというか、客席に向かって「この言葉をどう捉えるねん？」と問いかける感じがして非常に面白かったです。

観ていた環境が悪かったのかもしれませんが、ムニさんに関しては映像では声があんまり聞こえない部分があったので、ちゃんと観られたかどうか自信がないんですが…。

ほろびてさんは舞台稽古の動画を拝見して普通に楽しんでしまいました（笑）。

劇団灰ホトラさんに関しては「これが劇作家賞を獲ったらアメリカに賞をあげるのかな？」と思いながら観ていました。

（※劇団灰ホトラさんは日本国憲法全条文を台詞として上演されました。）

正直参加団体としては普通の観客のような精神状態では観られなかったですが、コンクールへ出場するからには何か持って帰りたいと思っていたので、すべての団体がまぶしく見えました。

アフターディスカッションでは市民審査員の方や専門審査員の方から作品について、あるいは演出に関しての質問が出たりもしましたが、ああいった観客の方とのやり取りについてはいかがでしたか？

「演出として声が大きすぎるのではないか」という質問を頂いて「関西の劇団ならではののではないか？」という話になったりもしたんですが、実はその一つ前の発言に僕はイラっとしてしまったんです。

専門審査員の西尾さんが「私の方がこの台本をうまく演出できるかもしれない」という旨の事を仰ったときに思わず「ナメんなよ」と思ってしまいまして、言葉はあれですけど…。僕も表現を生業としている人間なので。

仰った本人にもそんなつもりはないのはわかっているんですけど、観客の方に選んでいただいたオーディエンス賞の上演に対してそうした発言をされるということは、選んでくれた観客や市民審査員の方を下にみているような印象を与えかねないなって思っています。

上演に対して踏み込んだ言及をされるのならばこちらも反論しないといけないなと思ったんですけど、「声のデカさ云々」という話にすり替えてしまったんです。

実際コトリ会議なんかはものすごく声が小さかったりしますし、関西の劇団だからといって声量が大きいということもないんですが、うまく答えられませんでした。あの場で僕が本心で答えることで誰かを傷つけるかもしれないと思ったら、うまく言葉がでてこなくて。

オパンポン創造社を応援してくださっている方も関西や全国からYouTubeの配信でアフターディスカッションを観て頂いていたと思うので、僕があのような状況でしっかり答えられるメンタルを持ち合わせていなかったことをちょっと申し訳なく思いました。

専門審査員の方からの講評を頂いた上でのアフターディスカッションだったらまたすこし変わってくるのかなと思いました。僕自身もうちょっと平常心で臨めたらよかったと思っています。

あと西尾さんで思い出したんですけど、今回上演した『サンセット』の映画版が6月9日から上映される予定なんですけど、それに先だって6月2日に初演版を配信上映したんです。

アフターディスカッションの時に『サンセット』の上演の声量についての議論があって、



その後、初演版をあらためて自分でみてみたら、西尾さんがおっしゃっていた声量の部分について「たしかにそうやな」と改めて発見する部分がありました。

これまでは登場人物の二人が「死刑」という壁の向うの現実と向き合わず、逃げるためにもうちよつと無理する、という方向性で声が大きくなっていました。

でも僕ら自身の姿を描こうとするならば、その壁の向うの死刑という現実が分かっていたとしてもあえて声量を上げずにもっと小さい声で喋るというのも、僕らが置かれた状況を鮮明にあらわす表現になるんじゃないかという事を6月2日の初演の映像を観ながら思いました。

だから「あ、もしかして西尾さんはこういうことを言っていたのかな」と素直に思えて、アフターディスカッションの時に「コイツ、俺より上だと思ふなよ！」と少しイラっとしてしまったあの瞬間を反省しました（笑）。

演劇はどうしてもその日限りで、再演はなかなか機会や場所がなかったりするし、再演するよりも残りの人生で一本でも多く新作を書きたい気持ちもあるのですが、この『サンセット』はこの先も上演を続けていこうと思っている作品なんです。

小さい声で上演するというのも、『サンセット』という作品の可能性を広げてくれるかもしれない。

だから6月2日以降は西尾さんに対しても「ありがとうございます」という気持ちが芽生えました。アフターディスカッションでのやりとりがなければ、僕自身この作品についてそういう見方は生まれなかったでしょうから。

市民審査員の方からの質問の中には、ラストシーンで流れる「マック・ザ・ナイフ」という曲への質問がありました。

市民審査員の方から「ラストシーンで死刑囚が恩赦を望んで『マック・ザ・ナイフ』をかけたんじゃないか」という質問を頂いて、あの時思わず「その通りです！」と乗っかってしまいました。「あ、それもいいなあ」という、自分も予期していなかった解釈でした。

いろんな方々にこの作品について「登場人物たちがアホみたいな話をしている中で、それを観ている側が異なる受け取り方ができるようなものがつくれば」という話をしてきたんですが、それもある意味ではブレヒトさんの「叙事的演劇※」のような側面があるかもしれません。

(※主にドイツの演出家・劇作家のベルトルト・ブレヒトによって探求された演劇のあり方。観客を舞台のアクションに巻き込み感情を湧かせる演劇の劇的形式に対して、叙事的形式は観客を観察者にし、観客に目の前の出来事への理解を委ねるところに特徴がある。

DNP Museum Information Japan artscape Artwordsより。)

観てくれる方を誘導するのは結構簡単、という語弊がありますが、ひとつの答えを提示することでそちらに誘導はできるんです。でもあえて答えを提示せずに観ている人によって感じ方が違うようにできればということはずっと考えていました。



死刑を扱う作品という事で三文オペラの劇中歌「マック・ザ・ナイフ」を流したんですが、観る人によってはそういう捉え方も

あるんだということにあらためて気が付くことができ、非常にありがたい瞬間でした。

今回オーディエンス賞を受賞されましたが、野村さんは演劇の上演において観客の存在をどのように考えていらっしゃいますか？

演劇というもののコアに向かって走られている方々からは“俗物”と思われる可能性はありますが、僕は100人中80人ぐらいが楽しめるエンターテインメント性の高い作品を作っていきたいと思っています。

100人中100人が楽しめる作品をつくるつもりはないんですけど、表現というものを生業にして生きていきたい側の人間として、人によって受け取り方が違うけどちゃんとおもしろいものがつくれたらって思うんです。

僕は15歳から事務所に所属してこうした表現の仕事の仕事を続けてきました。

その中で演劇のコアにいけばいくほどお客さんが増えるというわけではなく、商業的になればなるほど自分のやりたいものではなくなる。そのバランスの中で葛藤しつつ続けてきた時間がただただ長いんです。

関西なのでお笑いには当然好きですけど、お笑いもちがって舞台を観ていることで観ている人の中に「気づき」があったり、なにかを「発見」するような瞬間を追及できることが演劇的なものの良さであり、僕が演劇に惹かれる理由なんです。

演劇の「コア」に向かう、時代の先端を担う尖った表現に挑戦する、という姿勢はもちろん高尚なことだと思います。

僕も本来そちら側の人間でいたいと思うんですが、それだけでは生きていけないという葛藤もある。劇場へ足を運んでくれたお客様を置いてけぼりにしたくないですし、笑ったり、揺さぶったりしながらお客さんとちゃんとか関係を結べる作品をつくりたいと思っています。観に来てくれた人に笑ってもらったり「おもしろかったなあ！」って楽しんでもらうのが僕の表現やと思うんです。

そうやって自分のつくったもので観に来てくれるお客さんを楽しませて、表現でお金を稼いで生きていきたい。そして僕はすべての人生をかけて表現に向き合って死んでいきたいなど。

今ギリギリなんとか表現だけで生きていける環境になってはいるんですけど、「演劇で食べる」と「演劇で生きる」というのはまたちがった問題になると思います。



僕としてはバランスをとりながら、どちらも両輪として走らせていければと思っています。

そのためにもやっぱり観客というのはなくてはならない大切な存在ですね。

関西の一人ユニットですけど、公演を重ねるごとに全国の皆さんから応援して頂いているのも純粋に嬉しく思っています。

来年の受賞公演で上演する際に観客席のお客さんの層がどうなるのか分からなくて怖いんですけど、僕にとっては今後の活動にとって大切なバロメーターになると思っています。リトマス試験紙のような方々ですね。

### 今後せんがわ劇場でチャレンジしてみたいなと思うことはありますか？

なによりも自分がやりたいことをできる場をせんがわ劇場で掴めたということが大切なことだと思っています。

僕の身近な若旦那家康さん（コトリ会議/ROPEMAN(42)）が関西にいながらすごく精力的にせんがわ劇場のDELで活動されているのを見ると「僕も何かできればな」と思います。

今回オーディエンス賞を頂いたことで来年三日間劇場をお借りできるので、まずはその受賞公演ですね。

今は仕事をするにもZOOMで打合せが出来たりしてオンラインで事足りてしまうんですけど、でもやっぱりライブの舞台というのが僕は好きなんです。

なので今後東京でも舞台活動をしていくための足がかりとして、せんがわ劇場で、次はもうちょっと「声の小さい」公演がしたいかなって思います。多分しないと言うか出来ない気がします(笑)

来年にはオーディエンス賞の受賞公演が控えますが、今後の野村さんの活動予定をお聞かせいただければと思います。



舞台だけではなくて、もうすこし裾野を広げている方々に観ていただけるような創作を重点的にしていきたいと思っています。

正直このコロナ禍の状況もあわせて演劇人生がいつ終わってもおかしくない状況ではあるので、一年に一本新作を書いたとて10年で10本。その中で「これは！」と思えるのが一本、二本あったらいい方だと思うんですね。

なので来年の受賞公演について過去作品の再演ということ考えたりもしたんですけど、今のところ「新作でのぞみたいな」という気持ちがあります。

オパンポン創造社は1人ユニットなので、単独での長編公演は普段なかなかできません。こうしてコンクールで賞を頂いて劇場を使える機会を頂いたので、思い切って新作の長編をつくりたいと考えています。

### 最後に一言お願いします。

冒頭でも述べましたが、こうして開催が一年延期となっても一組も欠けず無事にコンクールに参加して頂いた参加団体の方にまず感謝です。

あとは今回このコンクールのために力を貸してくれた劇団の音響照明スタッフ、舞台監督にも感謝ですね。

なかでも関西からわざわざ車を出して東京へ連れて行ってくれた照明の根来直義さん（Top gear）にいちばん感謝です。

この大変な時期に嫌な顔をせずに大阪から東京でのコンクールへの参加についてきてくれた共演者にもやっぱり感謝です。

ほんとうに感謝しかない演劇祭でした。

（以上）

聞き手：松本一步（演劇コンクール制作助手・第8回コンクールファイナリスト）